

私の戦争体験

真昼ともなれば赤熱の太陽が照りつく南海の孤島（ラバウル）も水平線の彼方に日は沈み、夜のとぼりが降りた頃ともなれば海からそそぐ潮風に、ほっと一息。陣屋の中で露営の夢も、各々に。思いを浮べてまどろむ頃。合間を破る爆音にふと目を覚まして空を仰げば椰子の葉影から見る星は数しれず。その中でもひと際輝く南十字星は金の十字か宝石で造った十字架のように美しく、私達のマスケットの様な存在でした。

戦況も段々と激しさを増して居た頃、日本軍は南海方面の制空権確保の為ソロモン群島のガタルカナル島に飛行基地を布設中でしたが、米軍に奪取され、其の飛行基地を奪回の為に出撃命令が下り、私達は改造艦のひさか丸に乗り込み輝く南十字星を迎えつつ一路ガダルカナル島に向ってラバウルの港を船出しました。時は昭和十七年十二月十六日の夜半時の頃でした。航行中は敵の妨害もなくガダルカナル島東海岸の上陸地点カンミンポの沖に本船が着いたのは同月十八日の未明でした。海岸線は珊瑚礁の海でどうてい本船の接岸は不可能で、本船から舟艇を下し舟艇で波渕近く迄が進み、そこからは海に跳び込み海岸に上り浜砂を蹴って一目散で椰子の林を抜けてジャングルの中に駆込んで行つた。其の頃はもう白々と夜も明けて敵の哨戒機が椰子の葉すれすれの超低空飛行でバリバリと機銃掃射をし乍ら飛んで行く。

私達は上陸地点のジャングルの中に分隊毎に装具を纏め草や木の枝を折りそれで遮蔽して六日分だけの食糧を各人携帯して最小限に身を軽装にして敵の背後から切込隊で奇襲攻撃を敢行すべく飛行場奪回の為出發しました。勇川の溪谷を登りバルチン山を越えルンガ川の上流に出ました。ルンガ川の河口附近が敵の飛行場の在る所で川に添ってジャングルの中を通り、又山を越え草原を横断し、又ジャングルの中にと道なき道を切り開き乍ら漸く敵の陣地の背後に進出して戦備を整えて敵の陣地近く迄前進して行くや、敵は各所に電波探知器を布設してあったので一早く察知され、追撃砲の砲撃を受け一進一退動く事もできず数日の間ジャングルの中に釘付になりじつと潜んでいました。疲労は出て来るし食糧は乏しくなり、又、炊事すれば煙がたつので炊くこともできず生米を噛んでは水を飲み、唯飢を凌いでいました。蚊には脅かされ、スコールは降り続き地面は水浸しで横臥する事もできず、飢えと寒さに叩かれてもう士気は沈滞し戦闘どころか生き

るのが精一杯でした。戦力も尽き果てやむなく撤退する事になり、隠密とんのうちにジャングルを脱出して元来た道を引返し、上陸地点のカンミンポに向って撤退を始めた。上陸以来二十三日目、後方からの補給もなく六日間の食糧もつきはて、椰子の実、草や木の皮、蛇・トカゲ、毒ではないものはなんでも食って飢をし、苦しさにも耐えてきました。衣服は破れ地下足袋はボロボロで、渡河とかする時は装具を外し濡れない様に頭の上に載せて渡って行く兵隊の進む後姿を見れば、股の肉は落ち骨と皮でまるで骸骨の行進の様で飢の惨めさを痛切に感じました。雨が降り続くジャングルの中で一夜を伏し、朝出発の時に点呼をとって見ると必ず一人か二人は倒れて死んでいた。遺留品として髪の毛を切り認識番号と共に背負袋せおいぶくろの内にに入れて持って歩いていった。ラバウルを船出した時は皆んな元気で張切って出て来たが、こうも悲惨な戦いになるうとは思っていませんでした。

ラバウルを出て来る時も南十字星は輝き美しかった。今見ても南十字星は美しい。上陸した時は中隊長以下百八十五名でしたが、乗船地点の海岸に辿りいたのはわずか中隊で六名、私の分隊で二名でした。部隊は乗船地点に集結し迎えにくる船を乗船地点のジャングルの中で待っていた。二日過ぎた頃駆逐艦雪風が迎えに来てくれ、舟艇に乗り本艦の側舷げんのタラップを無我夢中でよじ登り、甲板かんぱんに上り船室に誘導されたが、このとき水兵さん達の差し出した熱い一杯のミルクの味と温かさは感無量で今でも忘れる事ができません。

※ この体験記は、上尾市発行「私の戦争体験」（昭和六十年）に掲載されたものを、原文のまま再掲したものです。